この素晴らしい剣士に祝福を！

椎名Niis

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品はこのすばの世界にオーバーロードのブレインアングランスを転生させてみた作品です。

この作品は、作者がオーバーロードの中でパンドラズアクターと一二を争うぐらい好きなブレインをオーバーロード以外の世界で描いてみたかっただけの自己満足です。

そして、オーバーロード１４巻のネタバレを含みますのでそれでも良いと考える人は読んでください

目　次

始まり ―――――――――――――― 1
このすばらしい出会いに祝福を！ ―――――――――――――― 5

始まり

「ブレイン・アングランスさん、ようこそ死後の世界へ。あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました。あなたの生は終わってしまったのです」

唐突に美少女といえるであろう顔の整った女性にそんな事をこの真っ白い部屋で告げられた。

ブレインは、混乱した頭を回し、状況を理解しようとする。

（魔導王の手下って訳じゃなさそうだ。俺を生き返らしてもあんな化け物じみてる実力を持つ部下がいるから生き返らしても価値はないはずだしな）

ブレインは自身の最後を思い出す。コキュートスと名乗る戦士に戦士として敬意を込められて殺されたから、彼自身は悔いは多少あるが、納得はしている。

（あれだけ、無茶をして体が持たなくなるまで闘ったのに分かっていたことだが、全然届いていなかったな。まだまだ遠いということか）

「・・・さん？　・・インさん？　ブレインさん？聞こえていますか？」

「ああ、すまないな。少し考え事をしていてな。でだ、お前は何者だ？俺に蘇生の魔法でも使ったのか？」

「いえ、違います。私の名前はエリス。幸運を司る女神です。特別な方法で貴方様の魂を此処に呼びました。」

「ということは神様ってやつか？にわかには信じ難いな。俺は神様は信じないんでな。それに、肝心な時には俺は兎も角、アンタらを信じてる者を助けないからな」

「すみません。実はブレインさんが居た世界では私達のような者は存在していないのです」

「ふっ、神様と言うやつも完璧ではないらしいな。じゃあ、何故アンタ

らが存在しなかった世界から俺を連れてきたんだ？」
「実はですね。私達が管理している世界の1つに魔王がいて、その魔王軍の侵攻で世界が危機に陥っているのです。そして、その世界に居て、死んだ人々は転生することを拒否するので人数が足りないのです。そこで私達が管理している他の世界から若く死んだものを記憶をそのままに転生させる手段を取っているのですが、いかんせん魔王軍が強く、全然倒される気配がないのです。そこで、私達の管轄外で死んでしまった強い人の魂を呼んでみたら良いのでは？と言う事になりまして、ブレインさんをお呼びしました」
「なるほど、つまり、俺を利用して魔王を倒したいってことか？」
「そう言う事です。すみません。不快に思われるかもしれませんが、私達のお力になってくれませんか？勿論、ある程度の要望は聞くつもりです」
エリスは頭を下げながらお願いをしてきた。

「なるほどな。それにしても俺が強い人ねぇ」

ブレインは自分の身体を見る。死んだ時の恰好のままだった。少し違うのは腰に差していた愛刀がないことだろう。確かにブレインは強い方だが、化け物を見てきてその自信は砕けていた。

（普通に断るのが良いのだろう。少なくとも俺は満足して死ねたのだ。これ以上に恐怖を味わなくて済む。しかし、それで本当に良いのか？戦士としては強くなれる、やり直せるチャンスが有るならたとえ、越えられないと分かっていても最後の最後まで高みを目指すのが戦士として敬意を払って貰った俺のすべきことなのではないのか？）

不敵にブレインは微笑む

「なら、決まりだ」
「ブレインさん？」

不思議に思ったのだろう。エリスが心配そうにこっちを見てくる。その目を真っ直ぐ見て、ブレインは答える。

「決めた、いいだろう。このブレイン・アングラウスを利用してみろ！俺はもっともっと強くなり、一歩でもあの高みに近づけるようになってやる！」

「わかりました。ご協力ありがとうございます。早速ですが、何かご要望はありますか？」

「そうだな、なら、俺のこの手に馴染む刀を見繕ってくれないか？」

「そんなことでよろしければ、どうぞ」

エリスと名乗った女神が指を鳴らすと、ブレインの腰に刀が現れた。ブレインは刀を抜き、どのような刀なのか確かめる。

「その刀は、これから貴方様が行く世界で最高峰の金属のアダマンタイトで作った剣です。更に特別に私が神聖な力を込めておきました。満足いく物でしたか？」

「ああアダマンタイトか、悪くない。頑丈で切れ味が良い剣だ。これで十分だありがとう」

そう言い、ブレインは刀を仕舞い、女神に向き直った。

「さて、まだ続きはあるかい？」

「これが最後の説明です。これからブレインさんを駆け出し冒険者の街アクセルに転移させます。そうしたら、突き当たりを真っ直ぐに行き、左に曲がれば冒険者ギルドの看板があります。文字などは読めるようにしておきますので、ご安心を。そこに入って、冒険者登録するのが一番手っ取り早いと思いますのでそのようにしたらいいと思います。何か、ご質問はありますか？」

「それなら、一つだけ。俺がいた世界からこの世界に来た奴はいるの

か?ガゼフ・ストロノーフみたいな戦士とかは?」
「すみません。……実はこの試みは貴方様が初めてなのです。なので、ブレインさん以外の人はこの世界に来ておりません」
「そうか。……それが分かったならそれでいい、後の質問は、特にないな」
「わかりました。それでしたら、そこの魔法陣に入ってください」

ブレインは指定された魔法陣の描かれた床の上に立つ。
ブレインは心に闘志を燃やす。

(この世界で鍛え。必ず、必ず!あの高みに少しでも近づいてやる!シャルティア・ブラッドフォールン、セバス様、魔導王。そして、コキュートス。あの高みに!)

「いってらっしゃいませ、ブレインさん。あなたをこれから、異世界へと送ります。魔王討伐のための一人として。魔王を倒した暁には、神々からの贈り物を授けましょう。」
「贈り物?」

そう聞いたブレインにエリスは穏やかに微笑みながら、答えた。

「そう。世界を救った偉業に見合った贈り物。……　たとえどんな願いでも。たったひとつだけ叶えて差し上げましょう」
「そうか、なら楽しみにしておくよ」

その言葉にエリスは微笑みながら厳かに告げた。

「さあ、勇者よ!　願わくば、数多の勇者候補達の中から、あなたが魔王を打ち倒す事を祈っています。……　さあ、旅立ちなさい!」

そして、明るい光に包まれた。

このすばらしい出会いに祝福を！

石造りの街並みの中、ブレインは周りを見回した。
（ここが、駆け出し冒険者の街アクセルか。想像よりリエスティーゼ王国の街などに構造は似ているな。だが、こっちの方がリエスティーゼ王国のそこらの街より街全体に清潔感があるな。冒険者の町と聞いてたからもう少し汚い街をイメージしてたんだがな。見たところはいい街だな）
それよりもブレインは街行く人に驚く。
（人間と一緒に獣人族にエルフが歩いてる。王国ではそう、見られないような光景が広がっているな）
ブレインのいた世界では人間の力は世界全体に見てあまり強くなく、人間の国家は決して多くない。だから、法国などでは人間に限りなく近いエルフの奴隷が居たほどだ。王国にはそういうのは少ないが、歓迎されている訳では無い。だからこそ、この共存している風景にブレインは驚いていた。
（こんな光景が見られたとはな。あいつが見たら喜ぶかもな。さて、とりあえず女神様とやらの指示に従っといた方がいいかもな）
ブレインは、エリスに指示されたとおりに冒険者ギルドに向かった。

「いらっしゃいませー。お仕事案内なら奥のカウンターへ、お食事なら空いてるお席へどうぞー！」
ウェイトレスのお姉さんが、愛想よく出迎えた。
よく見ると酒場と併設されていた。ブレインは今の所、ガラの悪そうな奴は見つけられなかった。
（珍しいな。王国では冒険者ギルドに何かが併設されていたのはなかった。そして、ガラの悪そうな奴もいない。治安がいい証拠か）
そう関心していると、ブレインは視線がどことなく集まるのを感じ

た。
（なるほど、いうほど若くない新参者の男が見た事ない武器を持って駆け出しの街に来るのは珍しいってところか）
　ブレインは集まる視線を無視し、空いていた受付へと向かう。
「はい、今日はどうされましたか？」
「訳あって、遠くの方から来た者でな。冒険者登録とやらをしたいんだが」
「そうですか。では早速ですが手数料を頂いてもよろしいですか？」
「手数料？」
　ブレインは女神から金を渡されていないことに気付いた。誤魔化そうとズボンのポッケに手を入れ、探すフリをするとポッケに二枚の紙が入っていた。ブレインは自分の記憶になく、取り出してみる。そこには、『初期費用です』と書かれた紙と通貨に見える紙があった。
「これで足りるか？」
「はい。手数料は千エリスなので、お釣りは九千エリスです」
　無事、危機を脱することができたようだ。安堵しているブレインに受付は説明を始める。
　この世界の冒険者はどうやら王国とは大差ない感じらしい。しかし、ブレインにとって奇妙なのは経験値を表せるカードだった。今、ブレインは書類に記入しているが
　書いた後にカードに触れれば、ステータスが分かるというものだ。そして、ステータスによって職業が決まるらしい。
　ブレインはカードに触れ、受付に渡す。
「……はい、ありがとうございます。ブレイン・アングラウスさん、ですね。ええと……。す、凄いです！ほぼ全ての数値が圧倒的に高いです！唯一魔力だけが少し低くて、それ以外は知力と幸運も悪くないですし、これなら魔法職以外の上級職は全部つけますよ！」
「そうか……なら前衛の職業で適当なのを見繕ってくれないか」
「それなら、見た所、剣を持っているので、最強の攻撃力を誇る前衛の上級職、《ソードマスター》がオススメです」
「分かった。それでお願する」

「では、ソードマスター……っと。冒険者ギルドへようこそブレイン様。スタッフ一同、今後の活躍を期待しています！」
それに手を振り答え、ブレインはパーティー募集のボードへ向かった。

一応ブレインは魔王討伐をお願いされて来たのだから、倒すつもりでいる。そして、想像するのは、
（魔王と言われれば、嫌でも魔導王を連想させる。だが、俺がスカウトされ、討伐をお願いされてるなら、流石にそんな異次元では無いだろう。少なくても一つの魔法で何万人も殺せないだろう。なら俺でも倒せる可能性がある奴ということだ）
しかし、一筋縄で行かないだろうことがわかるのでブレインは仲間を作ろうと考え、パーティー募集の紙を眺めていた。
魔王を倒そうとするなら慎重に仲間を決めるべきと思い見るが、中々いい所がない。
（やはり、駆け出しの町とあって、余りハードルを高く設定されてないな）
「ん？これは……」
今日は諦め、軽くクエストの張り紙を見に行こうとして目線を移動させた先に、それはあった。
「パーティー募集、上級職限定。職業指定なしか」
（これから推測できるのは、新たにパーティーを強く、作り直そうとしているか、自分のレベルが上がり、釣り合う人を募集。てところか。いずれにしても募集を掛けているのは何かしら強みを持ってるやつだな。行ってみてもいいかも知れないな）
仲間になれなくても、接点を作るだけでも何かしらいい事になると思い、接触をしてみることにした。
とりあえず、紙に書いてあった場に行くと、泣き声が聞こえてきた。

「嫌ーっ！回復魔法だけは嫌！嫌よおっ！私の存在意義を奪わないでよ！私がいるんだから別に覚えなくてもいいじゃない！嫌！嫌よおおおっ！」
何となくブレインは募集を掛けてる奴があんな奴でありませんようにと思ってしまった。しかし、現実とは上手くいかないものである。
（やはり、募集を掛けてたのはあいつらか、様子を少し見ていたが余計に行く気が失せるな。だが、とりあえず行ってみるか）
「すまない、募集の貼り紙を見て来た者だが少しいいか？」
「あっ、はい」
そう茶髪の少年が驚いた様に答えた。

ブレインの横にカズマ、その向こう側に三人という風に座っている。
「えっと、とりあえず自己紹介を。俺の名前はサトウカズマです。職業は冒険者をやっています。一応このパーティーのリーダーをやっています。で、そこにいるのが」
「水を司る女神。ええ、そうよ。あの伝説の女神アクア様よ！ふふふ、今はアークプリーストだけど「ただの頭の痛いアークプリーストですのであまり気にしないでやってください」
「ああ……」
少し、ブレインの顔が引き攣った。
「ちょ！何勝手に妨害してんのよ！だからヒキニートなのよ！」
「なっ！それは関係ねえだろ！後、ヒキニートはやめろ！ニートじゃねえから！」
と二人は勝手に掴み合いの口喧嘩になっていた。

「ほら、二人ともやめてくださいよ。相手の人が困ってるじゃないですか。恥ずかしいですよ。ああ、気にしないでください。日常茶飯事なので聞き流していいですよ」
「そうなのか……」
(思ったよりヤバそうなところに来ちまったようだな。本当に来るところ間違えたかもなこれは)
「そして！我が名はめぐみん！アークウィザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者……！」
と、机に足を乗っけながら、女の子はさっきまでの静かさから一転し、そんな風に名乗りを上げた。
「めぐみん！それ、やめろっったろ！初見の人からしたらマジの迷惑なんだよ！」
「なっ!?紅魔族の伝統ある名乗りを迷惑ですと！結構です！紅魔族は売られた喧嘩は買いますよ！さあ！表に行きましょう！」
「やめろ！掴むな！掴むなっ！てかお前が相手に迷惑かけるなって言っといて今迷惑かけてるだろ！矛盾させるな！」
「私はダクネスだ。一応クルセイダーを生業としている。しかし、攻撃が苦手で盾の役割をするものだ。よろしく頼む」
「ああ、こちらこそよろしく頼む。ブレイン・アングラウスだ。職業は一応ソードマスターだ」
あの二人よりは真面目そうだと思い、ブレインはダクネスの握手に応じた。

一旦落ち着いたところで話を続ける。
「それで、ブレインさん。僕達はこれから墓地に行って、ゾンビメーカーの討伐クエストを受けようとしているんですけど、とりあえず一回、一緒にクエストをこなしてそれから決めるってのはどうですか？」

「なるほど、俺に反対意見はない。話し合いよりも組んで、相性を確かめる方がわかりやすいしな」
(そうだ、少し性格があれかもしれないが、いざ組んでみると戦いやすいこともありえる。俺が冒険者に苦戦した時は大抵、力量よりその連携に苦戦したからな)
「ふふふ、私の圧倒的な力を見せてあげるわ!」
そんなセリフにカズマは頭が痛くなった。

街から外れた丘の上の共同墓地。その近くでカズマ達は夜を待つべく、キャンプをしていた。
「あっ!カズマ!それは私が目をつけていた肉よ!あんたはこっちの焼けてる野菜を食べなさいよこっち!」
「俺、キャベツ狩り以降野菜が苦手なんだよ!焼いてる時に跳ねたり、飛んだりしないか心配でな」
と騒がしく、バーベキューをしていた。何かヤバいことを聞いた気がするが、ブレインは無視した。
「少し、墓地の方に湧いてないか、見張りに行く。遠くには行かないからゆっくりしてな」
「あっ、すみません。わざわざ」
「いや、気にするな。少し考え事をしたくてな。気分転換だ。じゃあ」
そう言い、墓地の中に入っていった。

めぐみんはカズマから水を貰い、それを飲みながら疑問を口にする。

「それにしても、珍しいですよねカズマ?あんな強そうな人がアクセルに来たなんて」
「ああ、そうだな。それにあの剣は……」

「カズマは知っているのですか？私はあんな形の剣見たことないですよ」
「いや、俺の故郷の剣に似ててな」
「へえ～そうなんですか」
（多分、俺より前に来た日本人が作り方を誰かに教えたんだな）

墓地の中を歩きながらブレインは考える。
（あっちの世界はどうなったんだろうな。クライム君には無事でいて欲しかったが、恐らく……。いや、考えるのは止めとこう。それにしてもこの世界の数値化は鍛える上で便利だ。全体的に数値を上げるべきだな。その他には……）
警戒して《領域》を発動させていたらそれに何か引っかかった。
「……ゾンビか？」
その先に視線を向けると三体のゾンビと少しだけ見た目が良いゾンビがいた。あちらも気付いたようでこっちに来る。
（カズマ達を呼ぶか？いや、この程度なら俺なら瞬殺だ。しっかりこの世界でも攻撃型の武技が使えるか試してみるか）
ブレインは《領域》の範囲内に四体全員が入るまで抜刀の構えで待ち構えた。
（今だ!!）
その瞬間、武技《領域》《神閃》《四光連斬》を組み合わせた爪切りが炸裂する。
四つの斬撃が狂うことなくそれぞれの体に切り込まれていく。更に刀に宿った神聖な力の相乗効果によりゾンビ達は跡形もなく消え、ブレインしか動くものはいなかった。
それを確認したブレインは鞘に刀を戻した。
（そろそろ切り上げて戻った方がいいな）
ブレインは転生初めての戦闘に満足し、カズマ達の元に戻って行っ

た。

そして、その後カズマ達と合流し、暫くして墓地の中に入っていき、優しいリッチーと色々一悶着あった。その光景を見ながらブレインは似てるようで少し違うと再認識した。リッチーと平和的に解決し、一件落着と思いきや、その帰り道。

ブレインは気になって疑問を口にした。

「そういえば、ゾンビメーカーとやらの討伐クエストはどうなったんだ？カズマ？」

「「「あっ」」」

「やべぇ、どうしよう！今から戻るか?!」

「落ち着けカズマ！もうこの時間帯じゃいないぞ！」

「ああ！失敗かよ！」

「口を挟むのは悪いが、ゾンビメーカーってどんなやつなんだ？俺のいたところにはいなかったんだ」

「ゾンビを操る悪霊で自分は状態の良い死体に入ってる奴なんだ」

「……そうか。カードに倒した覚えがなかったのにゾンビメーカーを倒してたのは全員ゾンビだと思ってた内一体がそいつだったのか」

「えっ！ちょっと見せてください！」

ブレインが持っているカードを受け取り、仲間と確認する。

（この人だ！俺に必要だったのはこんな感じの常識人でこんなファインプレーをしてくれる人なんだ！こんなポンコツ三人組とは違う！ヤバい！早くこの人を引き止めないと俺がヤバい気がする！）

カズマはそう思うと恥を全て捨て、それはそれは綺麗な土下座をした。

「お願いします！是非とも俺たちのパーティーに入って下さい！」

「うわ～。ないわー」

後ろでアクアが引いていたが、カズマは気にせずそのまま続けた。

「お願いします」
「そこまでしなくてもいいぜ。俺も迷ったが、もう少し一緒にいさせてくれ。お前たちはこの先なにか起こしそうな気がする。だからお前たちと一緒にいればそれに巻き込まれ、強くなれそうな気がするんだ。だから気にしなくてもいい。改めてよろしくな、カズマ君」
「はい！よろしくお願いします！ブレインさん」
厚く握手を交わし、こうしてブレインのパーティー入りが正式に決定したのだった。